2024年7月15日号（通巻115号）

NITTOSEIKO 日東精工 ニュースレター

京都府綾部市井倉町梅ヶ畑20番地／日東精工株式会社経営企画室発行

石井正文先生をお迎えして グローバルサウスとはなにか、そして2024年、今後の国際情勢をお聞きしました

5月30日、元・外交官の石井正文学習院大学特別客員教授を講師に迎え、役員を対象にした国際情勢を学ぶ勉強会を本社で開催。そして、その後、場所を変え、当社会長材木正己と社長荒賀誠と会食を兼ねての鼎談が行われました。今号はそれら二つを合わせて再編集してお送りします。

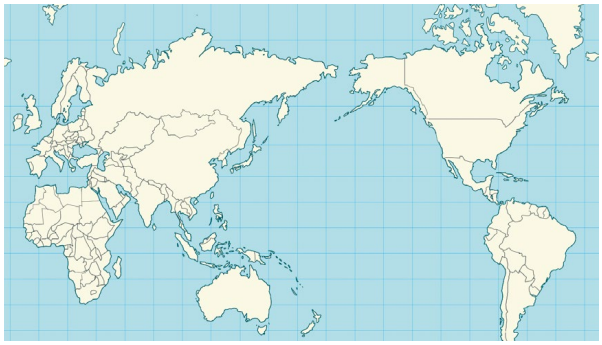
左が石井正文先生。右奥が当社代表取締役会長材木正己、手前が代表取締役社長荒賀誠（綾部「現長」にて）

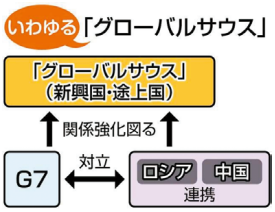
「グローバルサウス」を十把ひとからげで括ってはいけない

材木　石井さんは外務省ご出身で、外務大臣秘書官や国際法局長を歴任。ベルギー、イギリスやアメリカ、中東などにも駐在し、最後はインドネシア大使も務められた、いわば、「外交のプロ」でいらっしゃいます。本日は私どもの「勉強会」の講師としてわざわざ綾部まで足をお運びいただき、ありがとうございます。

石井　こちらこそありがとうございます。グローバル展開をされている企業にとって、やはり、いま目の前で世界で起こっていることの背景を知ったり、10年、20年先を見据えて戦略を立てられることはとても大切なことですね。私の話がお役に立てるのならうれしいことです。

荒賀　かつては「BRICS（ブリックス）」と呼ばれるブラジル、ロシア、インド、中国、そして南アフリカが成長著しい国として注目されていましたが、南アフリカに勢いがなくなってしまった。いまは「Global Southグローバルサウス」に注目しなければならない時代。「グローバスサウス」というと、アフリカ、ラテンアメリカ、アジアの新興国・途上国など「第3世界」と捉えがちですが、じつは十把ひとからげで括られるものではない、それぞれの国の特徴であったり、思惑・利害関係をしっかり理解してい

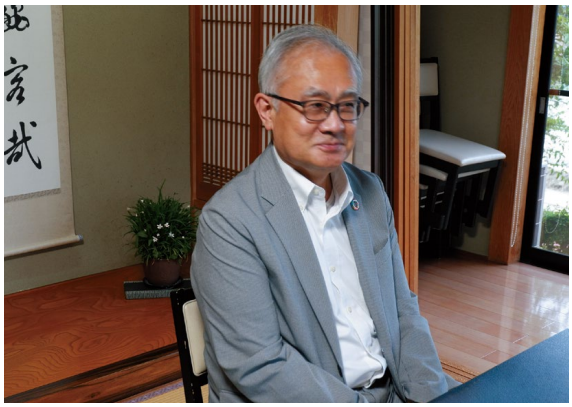




グローバルサウスとは、もともとは格差による負の影響や要因に着目するための言葉であり、地理的な線引きや国のグルーピングをするものではなかったが、一般には開発途上国や第三世界（資本主義陣営、社会主義陣営以外の国々）とほぼ同じ意味で使われることが多い。

くということ、個別の国の異なる事情について、テーラーメイド的な協力関係を築くことが大切だというお話を、石井さんには、ほんとうにわかりやく解説いただきました。

石井　BRICSの首脳会合（第15回）が昨年8月に南アフリカで開催され、あらたにアルゼンチン（後に参加を取り下げ）、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、イラン、エジプト、エチオピアの6か国が加わりました。しかしBRICSの拡大自体は注視する必要はあっても過度に警戒する必要はないと思います。一方、グローバルサウスですが、たとえばウクライナ問題の対応を見てもわかります。ロシアへ向けた国連非難決議では賛成が参加国193のなかで141、反対が5、日和見（棄権35無投票12）。ロシアが重大な国際ルール違反をしたにも関わらず、立場をはっきりさせない国が相当数あるということです。欧米にも中露のどちらにも与さない国、あるいは立場をはっきりさせない国があり、それらの国が経済的にも政治的にも影響を与えるようになってきた。そのときどきの状況でそれぞれに合わせた対応が必要となってくるわけです。〈うるさ型15人衆〉という表現を使いましたが（P5参照）、日本との関係性のなかで、まずは15の国の特徴を挙げました。



石井正文さん
駐米大使館公使（政務担当）、駐英大使館公使（政務担当）、駐ベルギー国大使兼NATO日本政府代表、駐インドネシア大使を歴任。2020年12月に、3年8カ月間の駐インドネシア大使勤務を終え帰国し、2021年1月に外務省を退官。現在は、学習院大学特別客員教授を務めるほか、りそな総合研究所顧問、株式会社日工の社外取締役を務める。テレビなどのメディアでも活躍

荒賀　この15か国のなかで当社日東精工グループと関わりのあるひとつがインドです。私どもは今般、現地のVulcan Forge Private Limited（バルカン・フォージ・プライベイト・リミテッド）と株式譲渡契約を締結し、Vulcan Forge Private Limitedおよびその子会社であるVulcan Cold Forge Private Limited（バルカン・コールド・フォージ・プライベイト・リミテッド）を100％子会社化しました。私どものねじは冷間圧造でつくっているのですが、この会社は同じ冷間圧造でも違う技術をもっている会社です。互いの販路活用や技術力の共有など事業のシナジー効果がを発揮できると考えたわけです。経済成長が大いに期待されるインド市場に自動車・二輪車の分野で幅広く市場参入していきたいと思っています。インドはGDPも2025年には日本を抜き3位になる、勢いのある国のひとつですね。

石井　インドへと出て行かれることはとても良いことだと思います。人口は世界第一であるし、2040年以降も老齢化がはじまらず、国力、潜在力が絶大。どこの国とも同盟せず、常に自己の国益を再優先できる国です。ただ、インド側から見たとき、日本への対応が変わってきているということも忘れないようにしたいですね。一つの例を挙げるなら、毎年、インドのグジャラート（モディ首相の出身地）で開催される見本市があり　各国からいろいろな企業が出展しています。日本からも多数出展し、日本のパビリオンはどの国よりも力をかけて立派なものにしていることもあり、モディ首相がこの見本市を視察するときは必ず日本館に立ち寄って、企業の人とも面談し記念撮影をしていたのです。しかし今年は打診をしてもなかなか返事がなく、結局、「モディ首相はどこの国のパビリオンにも立ち寄りません」という通達があった。それでも駐在インド日本大使が押しの強い人だったので、日本館の前を通られたときに、

挨拶をしながら半ば強引にお連れご案内したのですが、つまりは「日本をこれまでのように特別扱いしませんよ」というメッセージというわけです。

材木　モディ首相は日本通で、なかでも京都がお好きだとお聞きしているのですが、やはりインドはカースト制度が残っている国ですから、ランキングの上か下かが大事だということなのでしょうか？　自分たちが上になるのが時間の問題だとなると……

石井　それも少しはあるかもしれませんが、注目するというレベルではなく　注力するというぐらいの考えをもって進めなければということだろうと思います。「いいものがありますね」と注目するだけでなく、実際、御社のようにお金を投資して、いっしょになってつくっていく、注力する姿勢が大事です。そしてこれはインドだけでなく、これからの東南アジアとの関係も同じでしょう。日本とASEAN（東南アジア諸国連合）全体のGDP比でいえば、かつてはASEAN全部足しても日本が圧倒していたわけですが、それが、いまは半分、そして来年には逆転されるところまで来ています。インドネシアは2045年が建国100年にあたりますが、これに向かって先進国入りを目指していて、もしそうなると日本はインドネシアにも抜かれていくことになります。これまではアメリカが1位で中国が2位、日本は3位で、それも1位と3位の両方を足せば、2位の中国を凌駕できるということで意味があったわけですが、5位、6位では存在感が示せなくなってしまいます。日本はアジアではリーダーだったのが、one of them になってきたわけです。

材木　かつて「ジャパンアズナンバーワン」と呼ばれた時代もあります。そのころから見て、いまは失われた40年、50年などとも言われますが、言葉を返せば、いまが底、これからどんどん上向いていけるのだと、捉えられると思っています。私どもは、今回のインドを含め、現在9か国にネットワークを広げています。これは自己評価なので、

左／当社代表取締役会長兼CEO 材木正己
右／当社代表取締役社長兼COO 荒賀誠

ほんとうに正解かどうかはわからないのですが、当社が拠点を置く国の中でもその国の財閥と手を組んでいる現地法人があります。自分たちだけが儲ける、良い思いをするのではなく、皆に喜んでもらう。がんばってもらったら、がんばった分は報われる、私どもはこれを「絆経営」「幸せ経営」と言っているのですが、こういう経営姿勢をやっていることでうまくいっていると思います。

石井　素晴らしいですね。もちろん、そのためには相手の信頼を得ないといけないわけですね。外交でもそうですが、交渉事を進めるには互いに譲り合うといいますか、落としどころがあります。「ここまでは」というところを事前に情報を得ていると話がまとめやすいのですが、やはり、それは信頼関係が大きいです。

荒賀　相手のこと、その国のやり方をよく理解するということでもありますね。インドの方とお話をしていて「それじゃ、明日」とお約束しても、明日でないことも多い。最初は戸惑いましたが、「明日」は「明日以降のこと」というように解釈しています。

石井　アラブ圏では「明日」はボクラと言いますが、同じ意味で更に、「インシャアッラー」という言葉もプラスします。これはアラー（神）の思し召しのままにということです。明日とお約束するけれど、神さましだいでは変わることもあると

いう保険をつけるわけですね。

材木　私はインドネシアとタイに駐在したことがあります。もう何十年も前のことですが、警察官にここでは言葉にできないような「え！」とびっくりする提案をされたことがありますし、これは会社での話ですが、社長車の現地人の運転手に会食の席で長時間待たせると悪いと思ったので「もう引き上げてもいいよ」と帰宅させることが何度か続いたら、「今度の社長は仕事をさせてくれない」とクレームが入った。こちらは早く帰れば家族との時間がもてるだろうと、良かれと思ったことが、お金を稼がせてくれないという逆効果になったわけです。やはり、その国のことをしっかり知る必要がありますね。タイに関してはじつは最近、文部大臣とお話をする機会があったのですが、タイの国立大学などでは、アメリカやヨーロッパ、世界中から優秀な学者、研究者を呼び寄せているそうです。人財づくりにどんどん力を入れているのだというお話でした。いまは優秀な人財がどんどん育っているようです。

石井　それに少し関連しますが、第三世代問題というのもありまして……かつて日本はアジアではリーダーであり、ODAなどもあり、戦後第一世代の親が第二世代の子供に何かあったら日本を頼れ、日本を見習えといってきたわけですが、いまおっしゃったような　第三世代の若者はそういう縛りがまったくない。若い優秀な人も多い。そういう人たちがビジネス相手として、あるいは研修生としてやってきたとき、「若造だ」と舐めた態度、丁寧に対応をせずおろそかにする、上から見下すようなことをすると、すぐにとんでもないしっぺ返しを食うよと、よく言っているのです。

無関心ではいけない。
世界へ目を向ける大切さ

荒賀　石井先生に今日の勉強会では2024年、今年度の世界情勢についてもお話いただきました。いまはウクライナ問題もあれば、中東イスラエルとパレスチナ・ガザの問題もある。ミャンマーもあれば、北朝鮮の脅威もあります、いろいろと気にかけないといけないことが多いですね。

石井　2024年、これからというと、まずはアメリカの大統領選がありますね。現在の状況ではトランプさんが優位ですが、トランプさんが大統領になれば、MMGA（Make me great again）、トランプ劇場がはじまることは必至で、ウクライナへの支援も打ち切りになるかもしれません。対中関係、対北朝鮮関係の動きは各国への影響を与えます。ただ、ウクライナ問題についてもパレスチナの問題にしても停戦させなければいけないわけで、アメリカというよりも、全世界が知恵を絞って着地点を見いだす必要があるわけです。オバマ大統領が「アメリカは世界の警察官を辞める」と言ったのが2013年、それから10年経ち、アメリカの世論も半分はそれでいいとなっています。かつてはアメリカ単独で課題解決する時代でしたが、いまは各国負担、調整して課題を解決していく時代。そして、そのためにはなにか問題があった場合の制裁はかえって分裂を増長させてしまいます。報酬レジーム（良い行動に報いる）といったことが重要になってくると思います。トランプさんは逆風にあらがうことはしないということを理解し、日本が助かる方向の風を吹かせていくという発想が必要でしょう。

材木　当社は台湾にもそして中国にも拠点をおいているのですが、台湾有事、きな臭くなっているようですが……

石井　台湾有事は、私は当面は起こらないと思っています。当事者の中国も現況、起こしたいとは思っていない。要するにいま、ことを起こしても、メリット・デメリットを比較すれば、デメリットのほうが多いからです。中国にそういうふうに思わせるということが重要で、それが外交です。ただ、アメリカとのパワーバランスが崩れれば、今後、起こり得る話でもあるわけで、少しでも兆候を感じたら、すぐに引き上げるということが賢明

だと思います。

荒賀　こんなふうに国際情勢を学ぶことができてとてもありがたいと思います。グローバルに展開している私どもにとっては、リスク回避にもつながるわけです。ただ、一般の人にとってはなにか他人事といいますか、政治家や官僚の方々におまかせすることであって、自分たちがなんとかできるものではないと、そんなふうに考えてしまうのではと思います。石井先生は学習院大学でも講義をされているわけですが、学生たちは先生のお話にどんな反応をされているのでしょう。

石井　打てば響くというような感じではなく、自分事として十分に捉えられているかは少し疑問ですが、課題を出せばしっかり応えてくる。いまのこの問題が、じつは10年後、20年後の君たちの世代の問題になる、つながっているということはしっかり伝えていきたいと思っています。来年は国連ができて80周年の節目の年ですが、世界に目を向ける大切さをわかってもらいたいと……。

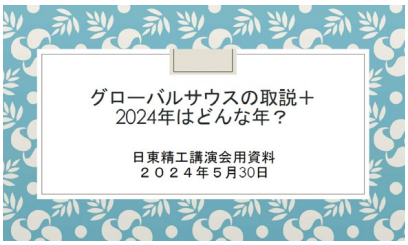
材木　つながっているということといえば、綾部市は少しおもしろいところで、人口3万少ししかいない小都市なのですが、世界連邦都市宣言第一号都市であり、中東和平プロジェクトというのも主導しています。これはイスラエルとパレスチナのそれぞれの戦争遺児を日本に招待して交流することで、憎しみの連鎖を断ち切ろうということです。そんな取り組みもしているのです。

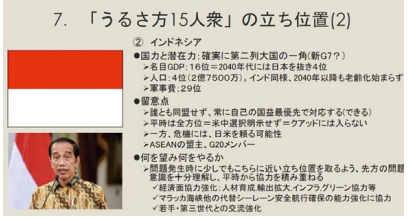
石井　綾部駅前にバラが咲いていて、その前にモニュメントがあったので、なにかなとのぞいてみたら、イスラエルとの友好都市を記念するものだったのですが、そんな背景があったのですね。素晴らしい取り組みですね。

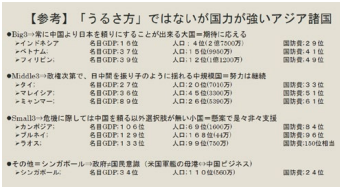
荒賀　ふだん、たとえば綾部の工場に勤務していると、どうしても目の前の仕事が中心になって、世界の動向への関心がなくなりがちですが、無関心であってはいけないのだと思います。

　ぜひ、石井先生には今後も継続して、オンラインでもいいので、国際情報をご教授いただければと思います。今日はありがとうございました。

5月30日に役員を対象にした勉強会を石井正文先生を講師に招いて開催。パワーポイントを使って国際情勢と当社とも関係が深い、インド、インドネシアなどの各国事情をわかりやすく解説いただきました







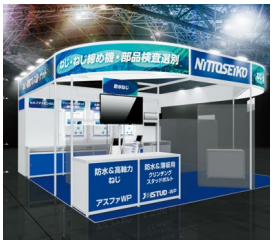
70周年を記念して 日東協力会が海外研修旅行を実施

日東精工の協力工場16社が所属する「協同組合日東協力会」が70周年を迎え、記念事業として5月16日から19日までタイ王国への海外研修旅行が実施されました。日東協力会に加え、当社からは材木正己代表取締役会長や荒賀誠代表取締役社長が同行し、総勢15名が参加。訪問したタイ王国では現地法人のNITTO SEIKO (THAILAND) CO., LTD.（＝NST 工業用ファスナー〈ねじ〉の製造）での工場見学をはじめ、同期間内に開催され現地法人2社が出展中であった展示会場（左下の項ご参照）も視察。異国でのモノづくりに触れ、有意義な研修旅行となりました。

NST社玄関前での記念撮影（上）と
NST工場見学（目視検査工程）の様子

「人とくるまのテクノロジー展 2024 NAGOYA」に出展します

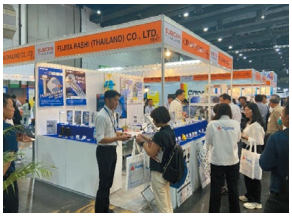
7月17日から19日までAichi Sky Expo（愛知県国際展示場）で開催される「人とくるまのテクノロジー展 2024 NAGOYA」では、当社ファスナー事業本部の防水ねじ「アスファ®WP」やコンタミ対策ねじ「CPグリップ®」をはじめ、用途別、素材別にさまざまなご要望に対応できる各種工業用ファスナーを展示。また産機事業本部の高精度ねじ浮き検出＆コンタミ対策モデルの「ねじ締めロボット」（ねじロボ®SR580Yθ-Z）と、「推力ほぼゼロ」のワークに優しい締結を実現した「単軸自動ねじ締め機」（参考出展）を展示します。そして制御システム事業本部からは部品検査選別装置「ミストルAI」、さらにグループ会社からも精密プレス部品、各種ナット・ドリルねじなどを出展し、日東精工グループの強みをアピールいたします。



展示会ブースイメージ

タイで開催された「SUBCON THAILAND 2024」に出展

タイ王国は世界10位の自動車生産国であり、ASEAN域内における最大の自動車生産国として「アジアのデトロイト」とも呼ばれています。5月15日から18日までタイ王国の金属加工メーカが一堂に会する展示会「SUBCON THAILAND 2024」が開催され、代理店である藤田螺子工業株式会社の現地法人FUJITA RASHI (THAILAND) CO., LTD.が出展されるなか、当社現地法人であるNST社（工業用ファスナー）とTNM社（自動ねじ締め機）も同ブースに製品を展示させていただきました。当社の製品と高い技術力が、自動車分野にどれほど貢献できるかをアピールすることができました。



代理店ブースに当社も説明員として
サポート

当社OB･OGを対象に 会社説明会＆工場見学会を開催

いまの当社の国内外での成長は先達の苦労・努力の上に成り立っています。同時に当社が時代のニーズに合わせ果敢に挑戦し、柔軟に変化してきたからでもあります（中期経営計画に基づき、昨今はよりグローバル化を図り、またメディカル事業など新規事業にも果敢に取り組んでいます）。

当社を卒業されたOB・OGの方々に、その変化、当社事業の成長戦略を深くご理解いただき、さらなる応援いただければという思いから、6月20日、日東精工OB・OGを対象にした会社説明会＆工場見学会を開催しました。またご参加いただいた方に、ねじの大切さをあらためて認識し、より親しみをもっていただけるよう「ねじMY箸袋セット」を記念品としてお渡ししました。

記念品の「Myねじ箸袋」

優良事業所として京都府知事表彰受賞

よい製品づくりは安全・安心の上に成り立つものです。6月7日に「令和6年京都府危険物安全大会」が立命館大学朱雀キャンパスで開催され、その席上で、日東精工が優良事業所として、京都府知事表彰を受賞しました。授賞式には当社取締役上嶋伸宏が出席。知事表彰を受けるのは1年にふたり（個人と会社各１）で、大変名誉なことであり、これからも当社では自主保安体制の確立と災害の未然防止を図ってまいります。

新入社員19名をメインにモデルフォレスト活動を実施

「環境との共生」「より良い地域づくり」を目指し、当社では6月6日に本社のある綾部市口上林地区でモデルフォレスト活動を実施しました。今年の新入社員を中心に当地区の自治会や京都府や綾部市の職員の方々とともに道沿いの伸びた笹を刈り、見通しの良い景観にすることができました。当活動は2013年から続けており、今後も環境保全意識の醸成を図ってまいります。

NITTOSEIKO'S SDGS（サステナビリティ経営推進）

地元綾部高校とコラボして「ねじの日」記念のウォールアート制作披露

6月1日のねじの日に当社ではこれまでさまざまな取り組みを行ってきました。マスコットキャラクターのネーミング募集（ねじっとくんに命名）を皮切りに、ボルトとナット＝おねじ・めねじをかたどった「ねじチョコ」をプレゼントしたり、〈身近なこんなところにもねじ発見！〉というねじの写真を募集したりしながら、一般の方に広く、ねじの役目や大切さを理解していただく活動を行ってまいりました。

本年は、当社本社をおく綾部市の綾部高校美術部とコラボしたイベントを実施。当社本社工場の塀壁（高校生の通学路にあたり、また山陰本線の線路沿いなので列車の窓からも眺められる好スペース）をキャンバスにして大きな作品・ウォールアートを綾部高校美術部の皆さんに描いてもらいました。デザインのテーマはねじが持つ役割である「つなぐ」。このウォールアートは地域の学生を巻き込みながら、地域の方々が憩える新しいアートスポットになることを願っています。

お披露目前に本社で式典を行い、協力いただいた綾部高校美術部の皆さんに、当社代表取締役社長の荒賀誠(左)が絵画用のエプロンと絵筆セットを進呈

原始人から進化し未来へつながる壁画（上）、大きなハートの前で女子社員が記念撮影

【誠の言霊（ことば）⑮】

想定外を楽しむ

代表取締役社長
荒賀 誠

エッセイストで、俳優で監督でもあった伊丹十三さんをＮＨＫが特集していました。かつて「遠くへいきたい」という旅番組で案内人を務めていたのですが、番組がはじまった当初は、どこへ行き何を聞くかをすべて伊丹さんがしっかりつくりこんで、すべて彼の「想定内」で収めていたそう。でも、それではドキュメンタリーにならないとカメラマンから指摘されてからは、敢えて「想定」を壊していき「想定外」を楽しむように切り替えていったのです。

そして、この特集番組でコメンテーターのひとりが「最近、スマホをやめてガラケーに戻した。スマホは便利だけれど、スマホですぐに検索し、すべてがわかったような気になってしまう。『野生を取り戻す法』までスマホで検索している自分に気づき、これではいけないと思った」と発言されていたのも印象的でした。

もちろん、いのちにかかわること、安全にかかわることなどは、ありとあらゆる想定をクリアにすることが望まれます。これはモノづくりの基本でしょう。しかし敢えて「想定」を壊すということも、忘れないでいきたいと思います。

毎日は難しくても、月に1回とか、休日はスマホを手放すのも悪くはないかもしれません。

「幸せ」を見つけるヒント ―― 7月

プロセスを楽しむ

スペインのバルセロナの大聖堂「サグラダファミリア」は1882年の着工以降、今、現在も建築中ですが、「時間をかけて皆で完成させていく」というその世界観にあやかって、当社が本社をおく綾部市でも「アヤベダファミリア」というプロジェクトが進行中です。これは吉本芸人のシャンプーハットのてつじさんが里山の古民家を購入し、たくさんの人とイベントを行いながら改修・再生していくもの。あるときは畳職人さんを招いて畳の勉強会、あるときは皆で酒造り体験といったように、さまざまなイベントを通してファンや地域の人が交流を深めていくもので、ときには想定外のことも楽しみます。空き家問題や地方創生についてのカンファレンス「空活会議（アキカツ会議）2023」で「第1回空き家活用大賞」に輝いています。

畳の勉強会の様子

結果だけを追い求めるのではなく、そのプロセスを皆で分かち合い、楽しむことも大事ですね！

日東精工代表取締役会長
綾部商工会議所会頭　材木正己

発行：日東精工株式会社経営戦略本部経営企画室
当社ホームページでは本ニュースレターのバックナンバーほか、事業や新製品のより詳しい情報を閲読いただけます